

他大学との連携に基づく教科指導力の形成・深化に関するアクション・リサーチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亘理, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007815

他大学との連携に基づく 教科指導力の形成・深化に関するアクション・リサーチ

亘理 陽一*

An action research on developing knowledge and skills of subject instruction in a pre-service course in collaboration with other universities

Yoichi Watari

要旨

平成 25 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトとして、信州大学教育学部の酒井研究室との合同研究会と、北海学園大学・浦野研教授による第二言語習得研究の観点からの英語指導法についての講演会を企画・実施した。互いの研究室に所属する卒業研究の中間報告・検討を合同で行うことで、相互に指導・助言を受け、異なる環境・視点からの刺激をもたらすことを企図した。質問紙による学生のふり返りの記述から、合同研究会・講演会の内容・議論、および前後の文献資料の検討・準備の過程で参加学生が得たものを探った。

キーワード： センター・プロジェクト、合同研究会、英語教育、教員養成

はじめに

本稿は、標記の平成 25 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトの報告である。

教師を目指す学生たちは、その過程の至るところで、「完成品としての教師モデル」と「なってから教師になっていくモデル」（あるいは無限の漸近線としての教師モデル）の両方を突きつけられる（グループ・ディダクティカ(編), 2012; 亘理, 2013）。このジレンマの解決は教師教育研究の基本問題の 1 つであろう。問題は、いずれのモデルも外から押しつけられるようなものではなく、彼ら自身が、教壇に立つ前にできる限り力量を高めておこうとする姿勢と、採用の前後に関わらず専門家として絶えず研鑽を続けていこうとする意識との間に折り合いをつけ、自分なりの目指す教師像を確立せねばならないということである。いずれの方向に対しても、そのためには同じ学部・専攻の「仲間」の範囲を超えて、切磋琢磨し得る比較の基準が外部にあることが望ましいと考える。

他大学との連携は、そのための有効な環境をもたらし得る。そこで、研究領域や学生の選択進路に類似点が多い、信州大学教育学部の酒井英樹教授の協力を仰ぎ、研究室単位の合同研究会を企画・実施した。互いの研究室に所属する卒業研究の中間報告・検討を合同で行うことで、相互に指導・助言を受け、異なる環境・視点からの刺激をもたらすことを企図した。

同時に今年度は、北海学園大学・浦野研教授に講演を依頼した。浦野教授は信州大学教育学部の卒業生で

あり、同大学院修了後にハワイ大学で学位を取得した、国内の第二言語習得・英語教育研究の中心人物の一人である。両大学の学生にとって指導教員とはまた異なるロール・モデルを提供することになるだけでなく、第二言語習得研究の観点から効果的な指導法や ALT とのティーム・ティーチングについて話してもらうことで、英語教育に関する教科指導力の深める大きなきっかけになることを期待した。

研究会の概要

合同研究会は、酒井英樹教授および酒井研究室所属学生の全面的な協力を得て、2013 年 9 月 15、16 日に信州大学教育学部（北校舎 2FN219 演習室）で実施した。プログラムは以下の通りである。

9 月 15 日

- 13:00-13:30: 全体会
- 13:30-17:30: 卒業研究中間報告
- 18:00-20:00: 懇親会

9 月 16 日

- 9:00-12:00: 講演と質疑
“Roles of Japanese teachers of English for increasing meaningful interaction: From a second language acquisition perspective.”（浦野研教授）
- 12:00-12:20: 閉会式

亘理研究室からは、4 年生 4 名、3 年生 3 名が参加・発表した。酒井研究室は 4 年生 6 名が参加・発表した。中間報告は、静岡大学教育学部英語教育専修の卒論・修論中間発表会と同様の資料を事前に準備・持

* 教育学部

参し、15 分程度の報告の後にそれぞれ質疑応答を行った。全体の進行は酒井教授と亙理が行い、中間報告の司会はホスト校として酒井研究室の学生が務めた。全体会では、酒井教授のリードのもと、互いの自己紹介も兼ねた英語コミュニケーション活動が行われた。中間報告や講演には信州大学教育学部の院生・研究生の参加もあった。

学生のふり返り

このような形で他大学との連携は、彼らの教科指導力の形成・深化にどのような影響を及ぼしたのだろうか。今年度はさしあたり質問紙による学生のふり返りの記述から、合同研究会・講演会の内容・議論、および前後の文献資料の検討・準備の過程での彼らの気づきや得たものを探ることにしたい。

合同研究会の後、2013 年度後期初回のゼミにおいても各自のふり返りをゼミ通信の形で発行してもらっているが（亙理ゼミでは毎回のゼミの報告に対して、報告者以外の記録担当者がゼミ通信を発行している）、2013 年 11～12 月に、あらためて次の 5 つの問いに答える形で合宿をふり返ってもらった。

- (1) 今回のゼミ合宿を通じて、英語の指導に関してあなたが学んだことは何ですか。自由に記述してください。
- (2) 今回のゼミ合宿を通じて見出した、自分の長所や今後の課題があれば教えてください。
- (3) 今回のゼミ合宿を通じて見出した、自分の長所や今後の課題があれば教えてください。
- (4) 静岡大学英語科の学生にとって、この合宿はどういう意味があったと（あるいは、今後も継続した場合、どういう意味があるか）思いますか。
- (5) 自分の（希望）進路について、いま現在、感じていることや考えていることを差し支えない範囲で教えてください。

(1)の「合宿を通じて、英語の指導に関して学んだこと」については、a)（英語教育研究のテーマの広さに対する気づきを含む）全般的な視野の広がり、b)英語教師に求められる知識・技能についての知見、c)具体的な指導技術・内容が挙げられた（下線は引用者による。以下、同様）。いずれも教科指導力の形成・深化に寄与し得る要素であり、彼らに多くの刺激を与えることができたと言える。

- 主に先輩方や酒井ゼミの方の発表を聞いて効率的な文法指導やリーディングの教え方やプロジェクト型外国語活動などあまり知られていない分野の発表を聞き卒業研究テーマの視野が広がりました。異文化理解についての発表もあり将来子どもたちに授業をするときに教えた分野も見つけることが

できました。

- このゼミ合宿で英語の指面で私が学んだことは、学校種によって教員に求められることも変わってくるということです。信州大学の学生の方々は皆中学校教員志望で、そのためなのか卒業論文のテーマも英語の文法を専門的に取り扱ったものが多かったと思います。私は小学校教員希望なので、どうしたら児童が英語を楽しんでくれるかばかり考えていましたが、中学校教員にはさらに文法に関する深い理解が必要なのだと感じました。
- 私が、今回のゼミ合宿を通して、英語の指導について学んだことは、インプットとアウトプットのバランスの大切さです。信州大学の学生の中には、アウトプット重視の調査を行い、生徒に①気づき②自らの仮説③メタ言語を与えるということを述べている方もいました。一方で、学生の発表が終わった後には、北海道学園大学の浦野先生からの講演がありました。その中では、理解できるインプットを大量に与えることの大切さに気付かされました。私は、卒業研究で現場に立った際に使えるような授業案を考えているので、その参考にもなりましたし、インプットとアウトプットをどのようなバランスで行っていくのかこれからもっと研究し考えていきたいと思うきっかけになりました。
- 英語の指導に関しては、ゲストティーチャーとして来てくださった浦野先生の講演がこれから教員になるにあたって有益なことをもたらしてくださったと思います。浦野先生の講演から、英語教育におけるインプットの大切さ、またそれをどのように与えていくかについて考えるよい機会を与えられました。特に、現在は授業もコミュニケーション活動などに重点をおくことが多く、どうしてもアウトプット中心に授業が組まれがちですが、まずはやはり、理解可能なインプットを十分に生徒に与え生徒がその意味を理解したり使い方に気付かせたりすることが必要であり、また、正しいインプットを多量に与え文字と意味のつながりを意識させることも重要であるということを学びました。ぜひ、来年からの教員生活でも生かしていきたいと考えます。
- 「隙見せ法」という新たな指導方法を学びました。書いたものを読み上げる際に、相手に質問の機会を与える（Do you understand?, OK?など）表現を加えるというもので、より自然な会話を続けるコツにつながっていると感じました。加えて、Culture assimilatorによる異文化理解トレーニングというものも学びました。ある一場面のエピソード（英語）を読み、その後の対応について、異なる文化的背景に基づく 4 択から解答を選択するも

ので、文化間に生じる誤解がなぜ生まれるのかを探ることができます。

- 英語教育に関して様々な研究が行われ改善されてきているが、まだ課題は多く存在すると感じた。教育も時代とともに変わり続けるものであり、また目の前の児童生徒によっても指導方法は変わってくるだろうと思った。具体的には、教科書を教えているだけでは学べない隙見せ法の有効性や、不規則動詞におけるアウトプットの効果などを学んだ。
 - 酒井先生の「隙見せ法」を体験したり、Bさんの研究報告を聞いたりする中で、用例基盤知識と規則基盤知識の考えに基づき、あらかじめ発言のパターンを得たり自分で話す内容を考えたうえでコミュニケーションを行うことは英語学習の上で効果的であることがわかりました。また、擬似コミュニケーションという言い方をされていましたが、真似することから始める方法も興味深く、自分で追求したいと感じた内容です。
- また、浦野先生のご講話とHさんの研究報告の中で出た「明示的指導」「暗示的指導」について、教育実習や自分が教育を受けてきた経験の中で何となく感じていただけだった指導の違いとその使い分けの考え方をわかりやすく解説していただき、理論に基づいた意図を持った使い分けが求められることがわかりました。

(2)の「見出した自分の長所や今後の課題」については、主として対人コミュニケーションにかかわる側面が長所として、多角的・批判的思考が課題として意識されている。英語運用能力に関する記述はそれほど多く挙がらなかった。このことは、彼らがその点を（他の学生と比べて相対的に）自分の長所とは感じることができていないという意味では課題を示しているが、逆に言えば大学の違いによる著しい違いは認められていないことを意味している。

- 自分の長所だと感じたところは、与えられたチャンスの中で多くの人と関わったことです。人見知りでありあまり社交的ではないと思っていましたが、先生方とも信州大学の学生のみなさんとも、また同じ静岡大学の仲間とも、深く関われたと思います。
- 新たな人々との出会いがありましたが、コミュニケーションにおける自身の人当たりのよさはそれなりに発揮できていたと思います。ただ、自身が英語教育についての知識が乏しいために、信州大学のみなさんの研究内容の理解に時間を要しました。英語教育専修に属している以上、その関連知識は事前に身につけておくべきだと痛感しました。
- 今回の信州大学さんとの卒論検討を通して、1つ

の視点から深く考えることは得意であると感じた一方で、広い視野やいろいろな立場から物事をとらえることが苦手であると感じました。自分が教師になるということから教師の視点からのみ考えている部分があつたこともありました。自分が提案したプランを行うことで児童がどのような学びを得ることができるのか、児童にとって本当に楽しいものなのかなども考えなければならぬと感じました。また、活動1つ1つを何のために行うのかという動機づけを考えていく力も鍛えていかなくてはならないと感じました。

- 自分の長所は明るく、初見の人でもすぐに仲良くなれることです。酒井ゼミの方たちは全員4年生でしたが3年生の私でも予想以上にすぐに仲良くなれて楽しかったです。今後の課題は後期の授業がたくさんあり忙しい中で卒論研究をいかに進めるかです。4年生の前期は教採勉強でもっと忙しいと思うので冬休みまでにテーマを決め、4年生になる前までに見通しを持って研究を進めていくことが課題です。
- 今後の課題は、準備です。自信をもって発表するためにも、また、質問の内容を推測したり、自分の中である程度見通しの立てられている研究だということを示せるよう、準備段階でもっと入念に考えておくべきだと思いました。
- 長所と言えるかわかりませんが、信州大学の学生さんたちの発表にも浦野先生のご講話にも興味を持ち、自分に落とし込んで考えながら聞くことができたので、そんな自分のセンサーの敏感さに気づくことができました。「自分が卒論で研究するなら…」や「それをこう考えてみたら…」「それはこっちでも使えるのでは…」というように少し膨らませていました。これは今まで自覚していなかったことです。課題として、自分のことを考え始めると戻れなくなり発表者の声を聴き逃してしまうところがあつたり、逆に話を聞いていても自分の共感する部分ばかり興味を持って聞いているだけで、批判的な見方や質問ができなかったりした点を見直していきたいと思いました。
- 英語で話したり書いたりといった productive skill が足りないと感じた。また、先輩方の発表を聞いてまだまだ英語教育に関する知識が浅いと感じたので、これから自分の卒業研究や将来に向けて英語教育に関する知識を増やしていく必要があると思った。資料作りやスピーチ力など、プレゼン能力も伸ばしたいと思った。

(3)の「信州大学の学生の発表や考え方に接して感じたこと」については、両教員の指導スタイルや研究アプローチの違いが端的に反映されたと言える。研究

室を超えたレベルでの課題も表明されている。ここには必ずしも否定的に捉える必要のない静岡大学の独自性も含まれているとはいえ、当初の目的の通り、「仲間」の範囲を打破し得る契機となったと言っていだろう。

- 信州大学の酒井ゼミの方たちは自分たちの発表をすべて英語で行う準備をしていたので驚きました。静岡大学も頑張らねばと思いました。しかし、発表では亘理ゼミの先輩たちの方が発表に慣れているせいか緊張はそこまでしていなかったように感じました。また、静岡大学亘理ゼミ生に対してのおもてなしがすばらしかったです。
- 信州大学の学生の発表は指導要領に端を発しているものや、文法事項やコミュニケーションスキルについての研究など、英語の指導法につながる分野の一側面を切り取って深く研究しようとしている、という印象を受けました。自分と類似した研究題目でも、その内容は異なることもありました。
- 各々の研究のスタイルも、教科書の比較検討や大学生に対する実験、など様々でした。私は英語教育専修ということもあってか、つい幼児への早期英語教育や各学校における英語教育研究を思い描くため、それぞれの学校でのアンケート調査等を行うという発想しかなかったので、実験を行うことが新鮮で興味深かったです。
- 信州大学さんの発表を聞いて、まず英語でプレゼンをしようとしている姿勢にとっても感動しました。信州大学の学生さんは中学・高校の教員を志望している人が多かったので、なおさら自らが英語を積極的に使おうとすることが生徒の英語を学ぶことのモチベーションを高めてくれるのだらうなと感じました。信州大学さんの発表の中で特に興味をもったのは、unplanned communication についての研究です。その中でできた隙見せ法（会話中に“OK?/Do you understand?”などと相手に隙を見せることでコミュニケーションを充実させる方法）は自分が小学校で外国語活動をする際にも取り入れていきたいと思いました。
- 静岡大学とは違い、中学または高校の教員を目指すコースということもあり、オールイングリッシュでの発表やその内容、また、留学経験のない学生の英語の堪能さから、英語に対する専門性を強く感じました。また、パワーポイントを使ったレジュメで見やすくまとめられており、プレゼン力の違いに驚かされました。パワーポイントを使ったプレゼンは、やはり、これからの時代に先駆けて、情報機器の利用や ICT を活用した教育を行う上でも必要な力だと思うので、静大でも取り入れていけたら良いと思いました。
- 信州大学の学生さんたちは、静岡大学の学生と比

べると理論的な研究が多かった。静岡大学の学生の研究はどちらかと言えば英語よりも教育に比重を置いた研究が多いので、信州大学の学生さんたちの発表はかなり専門的な言葉が多かった。その分野に詳しくない人でも理解のできるプレゼンをする必要があると思った。また、静岡大学の学生は自分で研究テーマを決めていたが、信州大学の学生さんたちは教授によって決められたテーマに沿って研究しており、研究動機がないのでなぜ研究しようと思ったかと聞かれたときに答えられないと思った。やはり自分の興味のある内容について研究したほうがやりがいもあり、モチベーションも上がるのではないかと感じた。

- 信州大学の学生さんたちは自分の卒業論文の概要を英語で発表しようとしていたことから、研究に対する意欲が本当に高いなと感じました。彼らを見習い、私も自分の研究に対して意欲的に取り組まなければならないと感じました。
- 英語教育に対する実践的な観点からの分析やオリジナルプランの検討を行っている静岡大学と信州大学の学生との違いをはっきりと感じました。様々な原因が考えられますが、大学あるいは研究室などの環境の違いによって、このような違いが生まれることは自分にとって新たな発見であり、印象に残りました。信州大学の学生の発表や考え方は、指導と習得の構造や英語教育の理論によりものを絞って焦点を当て深く追求しようとするもので、「研究らしさ＝（難しさ、専門性、求められる知識力など）」が強いと感じました。信州大学の学生の興味関心の向く方向や、英語で発表する様子などを静岡大学の発表や自分自身と比べてときに、静岡大学の学生は大学生としてレベルが低いのではないかと感じてしまいました。

(4)の「この合同研究会（を継続すること）の意味」については、想定通り、まさに「切磋琢磨し得る」対象との出会いとなり得ることに加え、教員（志望者）のネットワーク形成に寄与し得ることが彼ら自身から指摘されたことは大きな成果だと言える。

- 他大学の学生と関わる機会を得られたことに大きな意味があったと思います。同じ大学生どうし、共通点が多く見つかり、楽しかったということもあります。また、英語教育に関してはもちろんのこと、それ以外のことについてもお互いに違った意見や考え方を共有することで視野が広がり、自分の考えを深めることができました。大学に入学し様々な地域からやってきた人たちと関わることで自分の視野は広がったと考えていましたが、実際のところは静岡大学教育学部というまだ狭い囲いの中にいた事実気づかされましたし、静岡大

学の特徴を認識するきっかけにもなりました。学外でよい刺激を受け、それまでの大学生活を見直し、どうしたいか考えることにつなげるという意味があったと思います。

- 静岡大学には周辺に大学はあるものの、何か提携を組んでいる訳でもなく交流の場があるわけでもないで、他大学と関わる、もっと言うと同じ専攻で同じ夢に向かって切磋琢磨している仲間と関われることはとても有意義で、学びの多いものでした。静大にいただけでも多くの人と関わりますが、さらに足を伸ばすことによって、より広い世界に踏み入れることができますし、自分の価値観について深めることができる機会になると思います。
- 英語教育の分野における研究について、新たな知見を得られるという大きな意味があります。違う地域で同じ分野で同様の研究をしている仲間の存在に気付くことができるので、今後の研究の励みになると思います。こうした大学の垣根を越えた交流がさらにネットワークを広くしてくれます。
- この合宿は、自分の研究の中の課題を明らかにし、将来教員になった時へのモチベーションと安心感を高めてくれるとても充実したものになりました。信州大学の学生さんや先生方から、自分が気づかなかったポイントを指摘して頂き、自分の中で新たな視点を見つけることができたので、卒業研究をはじめとし、現場でも生かしていきたいとおもいます。また、教員を志す仲間のネットワークが広がり、何か壁にぶつかったとき、悩んだ時に共有できる仲間が増えたことが何よりの収穫だと思います。
- この合宿は自分の英語に関する見方を広げることはもちろんのこと、初めて出会う人と関わり合うよい練習になるのではないかと思います。私は人づきあいがあまり得意な人間ではないので、信州大学の方々を初めて見たとき、とても緊張しました。しかし、勇気を持って彼らに話しかけると彼らがみなとても気さくで優しい方ばかりだと気付き、打ち解けることができました。私はこの合宿で人と関わり合うことの面白さや素晴らしさを感じることができました。これからもこのような合宿が行われてくれたらと思います。
- 研究の中間地点での発表ということと、他の大学の学生に向けて発表いつもとは違う視点で聞いてもらうことにより、自分や自分の大学の学生だけでは気付かない新たな課題が見えてきて良かったと思う。また、実際に研究は他人に向けて発表してこそ意味があると思うので、自分の大学に居るだけでは得られない良い機会を得たと思う。また、発表はしなかったが3年生にとっても、今回

の発表を聞いて自分の研究テーマを考えていく良い機会になったのではないかと思います。英語教育について研究している教授に実際に会って講義を受けられたことも、モチベーションを高めることになった。

- 卒論研究の中間発表をすることでお互いにより刺激になると思います。発表する日までに自分の卒論研究を見直すいい機会になると思います。また、私たち3年生も見学することで来年にどこまで卒論を進めればいいのか目安がわかります。

(5)の「自分の（希望）進路についての所感」は、合同研究会とは直接の関係を持たないが、教科指導力の形成・深化とは、目先の指導技術の不足を埋めることではなく、以下に示されるような期待と不安と対峙し続ける術の獲得を含むものであるだろう。その意味で、この取り組みにおいても認識し、引き受けるべき課題を示していると言える。

- 進路が決定した今は、同じ職業に就いている方々からさまざまなお話を頂き、自分が本当にその職業に就く適性があるのか、不安に思うことが多々あります。多忙を極め、重い責任の伴う職業に耐えられるのか、と考えると気が重くなります。しかしながら、自分になりたいと思った理由に立ち返るとやはりその職業でなくてはならない、という決意に行きつきます。今の自分は希望と不安がシーソーゲームをしているような状態です。
- 私は、4月から静岡市の小学校教員として勤務します。最近、小学校に外国語活動が導入されましたが、今回のゼミ合宿やこれからのゼミ活動を生かし、もっともっと英語教育の知識や技術をつけていき、貢献していきたいです。
- 進路は決まったものの、その進路のために何をしたいかわからず、教員としてやっていけるのか、膨らむばかりの期待と現実のギャップについていけるのか、などの形のない不安もあり、いろいろなことを想像しながら過ごしています。しかし、今の自分にできることは、大学という広い自由な場で、人間としての魅力や人生の引き出しを増やすことだと考え、今までの自分を信じて目の前のことにひたむきに取り組んだり、新しいことに挑戦したりしながら、中身の濃い人間になれたらいいなと思いながら過ごしています。
- 私は来年度から小学校教員になることが決定しました。しかし、私にはたくさんの短所があり、またそれらは教員にとって致命的なものばかりです。自分の憧れていた職種に就くことができることをうれしく感じている反面、とても不安に感じています。少しでも短所をつぶしていけるよう日々意識していきたいと思っています。

- 進路希望は小学校教員であるが、外国語活動だけでなく他の教科についてもまだまだ分からないことが多く、実際に教員として働くまでに知識を増やし、実践力も高める必要があると感じている。
- 中学校の英語教諭になって英語を教えたいという希望があります。しかし、このまま 4 年で卒業して先生になっても自分が満足できないし、目指す先生像にはたどり着くことがないだろうと思っており、どうするべきか模索中です。
- 将来は高校の英語教師を目指しています。卒論はリスニングについて研究したいと思っています。

結語

この合同研究会は、来年は静岡、再来年は再び長野という形で継続的に実施していきたいと考えている。「アクション・リサーチ」という点で重要なのは、来年度以降であり、今回参加した 3 年生の変容である。期待される変容は、一つには合同研究会以降の授業・ゼミ等に対する取り組み方があり、他方には来年度の合同研究会への臨み方がある。

遠藤 (2013) は、福井大学の教員養成カリキュラムに対する信念について次のように述べている。

…深い学びには深い経験が必要である。しかし、ただ体験を繰り返しているだけでは何も学べない。人は体験したことを振り返り、その意味を多様な視点から何度も問い直すことで、実践について深く学ぶことができる。絶えざる経験の再構成として教育を捉えるなら、再構成するに値する濃密な経験が必要であり、その意味を多様な視点で深く問い直す省察の積み重ねが必要である (遠藤, 2013, p. 127)。

他大学との連携による合同研究会の試みは、現時点では限られた研究室によるカリキュラム外の取り組みではあるが、教員養成課程の学生に、その前後の授業やゼミが深い「経験の再構成」と足るような「濃密な経験」を与えようとするものであると同時に、それ自体、問い直しの視点と省察の機会をもたらすものであったと言える。

今津 (2012, pp. 63-65) は、教師の資質・能力が次の 6 つの層からなるものと捉えている。下へ向かうほど脱文脈的に適用可能な普遍的力量を構成するが、その分、外部からの観察・評価が難しくなる。

- (A) 勤務校での問題解決と、課題達成の技能
- (B) 教科指導・生徒指導の知識・技術
- (C) 学級・学校マネジメントの知識・技術
- (D) 子ども・保護者・同僚との対人関係力
- (E) 授業観・子ども観・教育観の錬磨

(F) 教職自己成長に向けた探究心

本報告は(B)の(特に教科指導にかかわる)知識・技術に関して学生が得たものに焦点を当てたが、少なからず(E)や(F)にかかわる揺さぶりをもたらしたことが示唆された。実際、教員養成課程におけるこのような取り組みを継続して実りがあるとすれば、文脈依存的な個別的力量に対してではなく、より普遍的な資質的力量に対してであろう。その過程をより多角的かつ分析的に把握し、教員養成課程・組織や教師教育全体へ示唆を得ることを今後の課題としたい。

謝辞

本実践は、平成 25 年度特別経費・学部長裁量経費センター・プロジェクトの助成を受けて実現した。

合同研究会の趣旨に賛同し、惜しめない協力を申し出てくれた信州大学・酒井英樹教授と北海学園大学・浦野研教授にここで改めて御礼を申し上げる。また、悪天候にもかかわらず、ホスト役として尽力し温かい心配りを示しつつ真剣に対峙してくれた信州大学酒井研究室の 6 名、そして教員の厳しい要求に応え熱心に参加・協力してくれた静岡大学亙理研究室の 7 名に心から感謝を表したい。

引用文献

- 遠藤貴広 (2013). 「学生の省察的探究を支える組織学習の構造：『教職実践演習』をどう利用したか」日本教育方法学会(編)『教師の専門的力量と教育実践の課題』(pp.125-137) 図書文化。
- グループ・ディダクティカ(編) (2012). 『教師になること、教師であり続けること』 勁草書房。
- 今津孝次郎 (2012). 『教師が育つ条件』 岩波書店。
- 亙理陽一 (2013). 「教員養成課程専門科目における教授内容知識の学習過程」『The Promising Age』, 30, 33-45.